

開催地名	東京都あきる野市
開催日時	令和7年12月23日(火) 14:30 ~ 16:10
開催場所	東京自治会館
語り部	佐々木 守 (岩手県釜石市)
参加者	東京都市町村防災事務連絡協議会会員 140名 (オンライン参加 90名を含む)
開催経緯	毎年開催しており、語り部の方の話を聞きより防災意識を高める機会としたい。
内容	<p>「大震災における釜石市の教訓から危機への対応 人的被害をゼロに」</p> <p>(1)釜石の土地の特徴</p> <p>大震災からまもなく15年を迎える。先日は青森県東方沖で地震があり、日本で初めて「後発地震情報」が出された。釜石でも余震が続き、また来るのではないかという不安が現実のものとして感じられた。</p> <p>釜石はリアス式海岸に位置し、明治29年、昭和8年、昭和35年のチリ地震津波など、歴史的に津波被害を繰り返してきた地域である。日本海溝、千島海溝での地震が起これば、東日本大震災を上回る津波が来るとも言われている。こうした土地に生きるということ自体が、常に危険と隣り合わせである。</p> <p>かつては製鉄所を中心とした企業城下町として10万人近い人口を抱えていた。しかし合理化と震災を経て、現在は2万7千人程度まで減少している。一方で、世界遺産となった製鉄の歴史もある。</p> <p>そのような町で防災は長く行政課題であったが、当時は“防災課・危機管理課”というものはなく、消防が中心で行うものとされていた。住民もまた、「どうせ大丈夫だ」「防波堤がある」という思い込みがあり、防災への意識は低かった。そこで自主防災組織を作り、訓練をして啓発活動を行ったが、すぐに意識は変わらなかった。</p> <p>唯一効果があったのは、子どもへの防災教育である。釜石では東大の片田敏孝先生の指導のもと、全国に先駆けて子どもたちへの防災教育を行った。大人の意識が変わらないなら、子どもたちに教えようと考えた。</p> <p>(2)東日本大震災の発生</p> <p>2011年3月11日、午後2時46分。市町村議会中に巨大地震が発生した。</p> <p>私は直感的に「これは絶対津波が来る」と思い、防災無線で避難を指示した。気象庁は当初3メートルの津波予報を出したが、実際には15メートルを超える津波が押し寄せた。「3メートル」と聞いて避難しなかった人がいた。数値が安心感を生み、逃げる判断を遅らせた。この反省から、後に私は「巨大な津波が来る」</p>

と表現を変え、市長の声で強い言葉を使って避難を呼びかけるマニュアルに改めた。

当日は停電で信号も止まり、車で避難する人が殺到し渋滞が起きた。家族を迎えに戻る人もいた。そうした中で津波が来て、町は一瞬で湖のようになった。木造家屋は流され、鉄骨だけが残り、瓦礫が市街地を埋め尽くした。

市役所は3日3晩閉じ込められ、通信も断たれた。携帯電話がつながったのは1週間後である。家族の生死もその時初めて確認できた。行政も消防も警察も海沿いにあり、町としての機能を失った。

(3)失われた町と日常

被害は甚大であった。死亡者は800人以上、いまだに150人以上が行方不明である。人口の4分の1が避難生活を余儀なくされた。水産業は壊滅し、船も養殖施設も流された。学校、役所、消防署、すべてが被災した。

特に被害が大きかったのが鵜住居、両石、根浜などの地区である。私の生まれ育った根浜も70軒あった集落が1軒も残らなかった。初めて現地を見たとき、涙も出ず、ただ啞然とした。

引き波で人も家も海に引きずられ、最近でも何十キロも離れた場所で骨が見つかった。防潮堤の背後も破壊され、「安全」と思われていた場所が最も危険であったことが明らかになった。震災から1か月後の避難所では、4月であったが体育館で寒さに耐えながら避難生活を送っていた。その後、復興住宅、高台移転、盛り土による宅地造成などが進められた。

地震発生後、小学校の生徒たちは校舎の3階に避難していたが、隣にある中学校の子どもたちと消防団が「絶対に津波が来る、ここも危険だ」と説得し、1.5キロ先の高台まで皆で逃げたのだ。その後、その校舎の3階まで津波が来た。もし留まっていたら、多くの命が失われていたであろう。これが「釜石の奇跡」と呼ばれた。しかし奇跡ではない、教育と訓練の結果である。判断力を持った人間が行動した結果である。

(4)避難誘導と避難所運営の現実

避難誘導は理想としては重要であるが、現実には極めて危険な行為である。東日本大震災では、避難誘導にあっていた消防団員、民生委員、町内会役員らが多数亡くなった。要支援者を助けようとして一緒に流される例が相次ぎ、「助ける行為」が結果として二重の犠牲を生んだ。

津波や直下型地震では、発災直後に人を助けに行くことは難しい。台風や洪水のように事前避難が可能な災害と異なり、地震や津波では「まず自分が逃げる」こ

と以外に命を守る方法はない。率先避難の重要性はここにある。誰か一人が逃げれば周囲も動く。人間の行動心理を踏まえた避難の在り方が必要である。

避難所では災害関連死が大きな課題となる。実際、熊本地震や能登地震では、直接死よりも関連死の方が多い。原因は避難所環境の悪さ、医療や服薬の断絶、精神的ストレスである。特にトイレの問題は深刻である。汚く少ないトイレは水分摂取を控えさせ、高齢者の体調悪化を招く。トイレは食料よりも優先すべきインフラである。

加えて、感染症対策、冷暖房、簡易ベッド、プライバシー確保、宗教・アレルギー配慮の食事、女性や子どもの視点、ペット同行の問題、感染症対策など多岐にわたる準備が必要となる。在宅避難をする方もいるが、そこまで物資・医療・情報が届かない。どう万全にしていくかも市町村の取り組みになってくる。

(5) 災害対策本部の運営

災害対策本部の役割は情報集約と早急な決断であるが、単独では決められず警察・消防・自衛隊・海上保安部などと共に、決めなければならない。映画のセリフにあったが、災害は会議室ではなく現場で起きている。現場職員が状況に応じて、柔軟に素早い判断できるような仕組み、役割分担が必要である。

実際に最も助けとなったのは、姉妹都市や災害協定自治体であった。東海市、荒川区、遠野市、北上市などは連絡が取れない状況にも関わらず、人手や給水車をすぐに手配してくれた。そういった普段からのお付き合い、自治体どうしの助け合いは大切だと感じた。また、今はボランティアがたくさん来てくれるが、その整理は大変であった。善意は貴重だが、むやみやたらに入られるのは、かえって現場の負担になる。現在では状況に応じて、いつからいつまで来てくださいと、事前に整理したうえでお願いするという流れが出来てきている。

(6) 「死なせない」対策の必要性

帰宅困難者対策は重要ではあるが優先順位は低い。生きている人より、命を落とす人を減らすことが先である。最も重要なのは「死なせない」ことである。

人間は正常化バイアスにより「自分は大丈夫」と思い込む。ハザードマップは安心材料ではなく、危険の目安である。想定を信じすぎた地域ほど被害が大きかった事実があった。行政が全て出来るわけではなく、住民も意識を変えて一緒に取り組まなければいけない。

(7) 最後に

最後に伝えたいのは、震災から14年が経ち、災害の姿そのものが大きく変わっているということ。地震、津波、火山、豪雨が重なり合う複合災害が常態化し、100ミリ級の雨がどこで降ってもおかしくない時代になった。

日本では毎年のように多数の死者が出ており、リスク管理が十分に機能しているとは言い難い。予知や予報には限界があり、だからこそ平時からの備えが不可欠である。

また、大槌町や陸前高田市のように市町村単独では限界がある。行政機能そのものが失われる事態が起きた場合、広域連携による役割分担が必要である。隣接自治体や地域ブロックで「どこが何を担うか」を平時から決めておく必要がある。被害想定やシミュレーションも、自分の自治体だけでなく、流入避難者や都市部被災時の役割まで含めて考えるべきだ。

さらに、災害時にはデマや虚偽情報がSNSやAI映像を通じて急速に拡散する。規模が大きくなるほど混乱も増すため、正確な情報をどう届け、どう訂正するかという体制整備も今後の大きな課題である。

日本人は悪いことがあっても「水に流して…」といたりするが、それが危機感の風化につながっている。「こんな災害は初めてだ」という言葉が毎回繰り返されるのは、人が自分は被災しないと思いつむ正常性バイアスの表れである。しかし人は50年や100年しか生きず、誰にとっても大きな災害は「初めて」になるのは当然であり、だからこそ常に危機意識を持つ必要がある。

「安全な街」というものは存在せず、自然災害も事故も犯罪も含め、どこにでもリスクはある。重要なのは、それを前提としてどう生き、どう備えるかである。どれほど高い防潮堤を造っても、それを超える災害は起きる。だからこそ最後は人の行動である。

行政だけでなく住民も含め、自助・共助・公助を分担し、誰も死なせないことを最優先にする社会をつくる必要がある。石碑や遺構を残すだけでなく、記録し、検証し、次にどう変えるかという「文化」として防災を継承しなければならない。そのためにも映像などで記録を残すことが必要である、それを次に活かしていくことが、後に人々の命を守ることになる。

	
開催地より	<p>講師には思い出したくないような内容についてもお話いただき、釜石市の教訓から「人的被害をゼロにする」という強い思いが伝わった。行政職員として、頻発化、激甚化する災害に対して、危機管理意識を高めて備えなければならないとあらためて考える機会となった。</p>